

# 東北 VALUE SIGHT 秋田



秋田プロバスケットボール株式会社 代表取締役社長  
**水野 勇気 (みずの・ゆうき)**

1983年、東京都杉並区生まれ。高校卒業後、Seattle Central Community College入学。2004年、国際教養大学国際教養学部入学。3年次にオーストラリアのGriffith Universityへ1年間留学し、スポーツマネジメントを学ぶ。08年秋田プロバスケットボールチームをつくる会発足。09年秋田プロバスケットボールクラブ株式会社代表取締役社長に就任。秋田ノーザンハピネッツは、bjリーグ2010-2011シーズン「ベストブースター賞」受賞。秋田プロバスケットボール株式会社 〒010-0922 秋田市旭北栄町1-5 秋田県社会福祉会館 本館4F TEL 018-865-0521・FAX 018-865-0522 <http://www.happinets.net/>

東京出身の若者が、秋田を元気づけている。  
秋田プロバスケットボール株式会社の水野社長は、秋田で盛んなスポーツ「バスケットボール」のプロチームをつくり、秋田県民を夢中にさせるべく挑戦し続けている。  
一過性のブームに終わらせることなく、今後も県民に愛され、秋田県に根ざしたチームとして確立されることを期待したい。

## 秋田初の“おらほ”のプロチーム誕生 バスケットで秋田を元気に

### 秋田をもっと元気にしたい

私の出身は東京都杉並区である。秋田には国際教養大学入学が縁で8年前に来た。山・川・海と自然に恵まれた環境、豊富な温泉地、おいしい食べ物、温かい人々と、どんどん秋田を好きになっていった。しかしその反面、何か街に活気がないと思うことも多くなっていった。

「秋田をもっと元気にしたい」その思いが強くなり、秋田を活性化するには何が必要かと考えたとき、留学先のアメリカやオーストラリアで見てきた光景が思い浮かんだ。両国ともプロスポーツ大国で、プロチームがあることが当たり前前の光景であり、地元チームを応援するという日常をみんなで楽しんでいた。地元プロチームを通じて、地域の人たちの交流も生まれていた。

日本でもJリーグがスタートして以来、プロ野球の独立リーグ、そしてバスケットボールのbjリーグと『地域密着』をキーワードに全国各地でプロスポーツチームが誕生し、地域おこしの核を担っている。しかし、秋田にはまだ『おらほのプロチーム』が存

在しなかった。

秋田のスポーツと言えば、真っ先に頭に浮かぶのがバスケットボールである。秋田には全国優勝58回という輝かしい実績を誇る能代工業高校があり、古くには秋田いすゞ自動車が天皇杯を獲得している。そんな『バスケット王国』秋田に頂点としてあるべきプロチームがなかった。

ないなら創るしかないという考えのもと、秋田に残る決意をし、チーム創設活動を始めた。大学卒業後すぐであり、当然お金はなかった。あったのは、チームをつくりたいという熱意だけだった。最初は私と高畠(現・専務取締役)の2人で活動していた。署名活動、街頭でのPR活動、秋田の財界人へのアプローチ。当初は「秋田でプロスポーツチームなんてできっこない」というようなことも言われたりしたが、決してあきらめずに活動していると、徐々に徐々に活動の輪は広がっていき、2009年5月にはbjリーグ参入が決定した。

として、中村和雄氏(男鹿市出身)を招聘した。中村HCは秋田が生んだ名将であり、今後のチーム力の底上げが大いに期待できる。現在13勝9敗(2011年12月26日時点)と昨シーズンをはるかに凌ぐスタートを切っている。

### 秋田に永続するチームを目指して

よく秋田県民は“熱しやすく・冷めやすい”県民性だと言われる。だからプロチームを運営するのは大変だよと言われることも多々あった。ただそういったことはチーム運営には関係ないと考えている。なぜなら、私たちはブームをつくらうとしているわけではないからだ。ブームには流行・廃りがあるので、そこには“熱しやすく・冷めやすい”ということが当てはまるかと思う。しかし、私たちが目指すところは永続するチームである。

シーズン2年目の開幕戦、2011年10月16日『県民球団宣言』というセレモニーを行い、永続するチームを目指すことを誓った。宣言の中では、秋田NHの活動理念を3つにまとめ、理念を具現化していくために7つのビジョンを発表し、今後の活動指針としていく(詳細は球団HP参照)。

### これから目指すチーム像

世界的に見て、小さな都市ながら成功しているプロチームの最たる例が「グリーンベイ・パッカーズ」ではないかと思っている。パッカーズはウィスコンシン州グリーンベイを本拠地とするNFL(アメリカンフットボール)のチーム。パッカーズは熱狂的な

ファンが多いことで知られており、NFL最多となる13回の優勝を誇る。

そんなNFL屈指の人気チーム、パッカーズではあるが、なんと本拠地グリーンベイはわずか10万人余りの都市。アメリカプロスポーツ界でもっとも小さなフランチャイズ都市である。他のNFLのあるチームは人口100万人以上の大きな都市にあるのがほとんどである。パッカーズは地元の人たちに支えられており、NFLの中で唯一の市民株主チームとして運営している。そんな小さな町で、パッカーズの7万人収容スタジアムは常に満員となる。入場チケットは1960年以来50シーズン連続で完売しており、年間のシーズンチケットも常に完売中。現在シーズンチケットの購入希望者の順番待ちは7万8,000人とのこと(生きていうちにシーズンチケットを手に入れることは無理とのこと!)。シーズンが終わる前に翌年のシーズンチケットを更新するため、手放す人がほとんどいない。シーズンチケットはパッカーズファンの家宝となり、親子3世代でチケットが引き継がれていっているのである。

パッカーズがそうであるように、秋田のような地方都市でも、大都市よりも多くの観客を集める人気チームとなることは可能だと思っている。しかし、そのためには地元の人たちの支えがなくてはならない。秋田の人たちがハピネッツを応援し、『誇り』や『元気』を感じられるような、そして子どもたちが『夢』を得られるような、地域に根ざしたチームを目指していく。

そのためにも、3年以内に優勝を狙えるような強いチームづくりにも着手していく。

秋田NHが秋田の人たちに愛され、常に試合会場に足を運んでくれるようなチームをつくれるようこれからも精進していきたい。目指せ、グリーンベイ・パッカーズ!



秋田ノーザンハピネッツの試合風景。観客は「GO! GO! HAPPINETTS」の旗を手に応援(左写真)。

下は、秋田ノーザンハピネッツのチームロゴ。



### 秋田ノーザンハピネッツ始動

2010年10月16日、秋田初のプロバスケットチーム『秋田ノーザンハピネッツ』(以下、秋田NH)の1年目シーズンがスタートした。1年目の成績は18勝32敗(東地区7チーム中6位)と苦戦したが、平均観客数は2,250人と16チーム中リーグ2番目を記録した。目標の1試合平均2,500人には届かなかったが、成績が苦戦する中ある程度の集客を収めたことに、改めて秋田でのプロバスケの可能性を感じた。

2年目シーズンを迎えるにあたり、チーム力の強化が必要であった。そこで新しいヘッドコーチ(HC)